

Title	アメリカ現代詩におけるフランス象徴詩の影響：批判史的序論
Author	古賀, 哲男
Citation	人文研究. 39 卷 7 号, p.505-520.
Issue Date	1987
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学部
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

アメリカ現代詩における フランス象徴詩の影響

—— 批評史的序論 ——

古 賀 哲 男

1. Taupin 再評価

最近になって漸く英訳された René Taupin の先駆的著作, *L'influence du symbolisme français sur la poésie américaine (de 1910 à 1920)* (1929) (Pratt: 1985)¹⁾ の今日的意義は英訳者 William Pratt の序論及び結論においてほぼ妥当な評価が与えられていると考えられるが, 特に序論:「アメリカ現代詩のフランス起源」における Pratt の2つの論点(1. 影響の問題, 2. サンボリズムとイマジズム)は現代詩研究家 Pratt が素描したユニークかつ正当な議論と言える。そこではアメリカ現代詩人たちがエマソンのいわゆる「知的独立宣言」(“The American Scholar,” 1837)以来, そしてホイットマンとポウという2人の先駆的詩人以来, いかにもイギリスの詩的伝統という「影響の不安」に悩みながらも自らの「詩的独立宣言」を達成するため汎ヨーロッパ的な, より国際的な伝統へと向っていたかが述べられている。とりわけディラン・トマスとハート・クレインという2人の現代詩人に典型的に象徴されるフランス象徴詩の運命は, 異国語間の文化的翻訳の問題のみならず, 実に「影響」が詩的「靈感」の問題と結びついているという意味でいわゆる比較文学的な実証主義的方法で検証出来る性質の問題ではない。

Cleanth Brooks の Edmund Wilson 批判 (Brooks: 1939) に言及し, またエリオットの「形而上詩人」論 (Eliot: 1921) における「感受性の分裂」説を援用しつつ展開する Pratt の議論はそれ自体で啓発的なフランス象徴詩論となっており, とりわけ Taupin の描いたイマジズムの生成発展過程を概観し, その思想的背景を説明する Pratt の序論は既に数多くの現代詩

研究書ではほぼ定説化した主張ではあるが、改めてその意義を確認する態度には今日の現代詩研究者の模範的実践がある。また、結論：「フランス象徴詩の影響を越えて—1920年以後の主要なアメリカ詩」における Pratt の議論は、エリオット、パウンド、クレイン、ウィリアムズ、スティーヴンズの5人の主要なアメリカ現代詩人の長篇詩（『四つの四重奏曲』（1935-42）、『詩篇』^{トウズ}（1930-69）、『橋』（1930）、『パタソン』（1946-58）、『悪の美学』（1944）等）に焦点を当てることによってサンボリズム²⁾の遺産を検討するものであるが、その概観的指摘にもかかわらず、Taupin が予告したサンボリズムの新たな展開を明確に跡づけていると言えよう。

ところで以上のような「アメリカ現代詩におけるフランス象徴詩の影響」或いはより広汎には現代詩におけるサンボリズムの意義についての議論は Haskel M. Block (Block: 1970) も指摘するように Arthur Symons の『文学における象徴派運動』（1899）や Edmund Wilson の『アクセルの城』（1931）といった記念碑的な著作以後、多大な変化を被ってきた。Pratt の議論自体そのことを示すものであるが、事実サンボリズムに関する研究は幾人かの先駆的研究³⁾を経た今日でも未開拓の領域であり、現代詩研究自体が比較的新しい分野であることと相まってその歴史的意義や個々の詩人の作品に現れる具体的な様相についての議論は未解決・未整理の問題が多い。以下、私達は批評史的立場から Taupin 以後の比較研究を通覧しつつ、また一方でそのような実証的研究とは対立する批評的立場として、特に神話学的研究や構造主義的研究、さらにはフォルマリズムや記号論などに啓発された近年の解釈学的研究に言及しつつ、アメリカ現代詩におけるサンボリズムの展開を跡づけてみたい。

2. サンボリズム研究の発展

Anna Balakian は10年前に行ったサンボリズム研究の再評価を新版 (Balakian: 1977) への序文及び後記で以下のように行っている。

1) 「サンボリズムの果実はその開花よりも栄光あるものであった。」(p. x) [この主張は Guy Michaud や Kenneth Cornell の象徴派詩史の修正を意味し、関心が「クラブ」（いわゆるマラルメの火曜クラブ）の時代以前、或いは以後に移ったことも意味する。]

2) 「サンボリズムの化身は今世紀初期にまで拡がり、後期象徴派という

よりはマラルメ的と定義すべき美しくも黄昏的詩を生み出した。」(p. 199)
 [この主張は、世紀末のデカダンスの再評価を意味し、ヴァレリー、イエイツ、リルケ、スティーヴンズ等の詩人たちによるマラルメの遺産の継承を主張するものである。]

以上の指摘からも分かるように、サンボリズム研究においても関心がいわゆる「フランス象徴派詩人」からより広い意味でのサンボリストに移ってきている。Balakian 自身が編集する比較文学研究誌(『ヨーロッパ諸言語における比較文学史』国際比較文学協会)や、彼女の監修するサンボリズム研究書誌(Anderson: 1975)における数多くの比較文学研究もそのことを如実に示していると言えよう。なお Balakian が挙げる1967以後の特筆すべき研究としては、Gsteiger『ドイツ世紀末文学(1869-1914)におけるフランス象徴主義』(1971)、Karátson『ハンガリアにおけるサンボリズム』(1970)、Peyre『象徴主義とは何か』(1974)、Lawler『フランス象徴主義の言語』(1969)、Kugel『象徴詩における異化の方法』(1971)、Boon『象徴主義から構造主義へ』(1972)、Aguirre『アントニオ・マカドの象徴詩』(1973)、Benamou『ウォーレス・スティーヴンズの作品世界(sic)』(1972)などがあるが、特に私達の関心として、アメリカ現代詩人のスティーヴンズにおけるサンボリズムの変容を研究した Michel Benamou の業績が Balakian のような国際的サンボリズム研究者に高く評価されていることの意義をサンボリズム研究の発展と共に考える必要があると思われる。

さらに Balakian の主張するところに依れば、このようなサンボリズム研究の発展は単に慣習的に「サンボリスト」と呼ばれる人々の作品だけではなく、幻視的な神話によって象徴主義的表現をとる作家たちの作品(例えば、Balakian はサミュエル・ベケット、アナイス・ニン、エミリオ・モンターレ、ヘンリー・ミラー、ジョージ・セフェリス等を挙げている)にも確認できるものであり、オルフェウスの下降と天使的上昇、神秘的ヴェール、神託的言語と沈黙との霊的交信、といったモチーフは神なき現代において紛いなきサンボリストの刻印を持っているとされる。そして後記で論じられるようにマラルメが「バラの理想的過ち」(「牧神の午後」)と呼んだ美のデカダント的追求こそが現代におけるサンボリズムの課題であり、スティーヴンズの「至高の虚構」や、イエイツの「ピサンチウム」、リルケの「オルフェウス」や、ヴァレリーの「ナルシス」がマラルメ的サンボリズムの現代的表現として語られる時、私達は必然的にそのような主題を扱った研究(例えば、

Strauss『下降と帰還—現代文学におけるオルフェウスの主題』(1971)や、Hassan『オルフェウスの解体—ポストモダンの文学へ向けて』(1971)なども現代詩研究と共にサンボリスムの遺産を検討するものとして考察の対象とせねばならないであろう。

ここで、このようなサンボリスム研究の発展を本論考の表題として掲げた「アメリカ現代詩におけるフランス象徴詩の影響」に限定するならば、先に言及した Haskell M. Block の包括的議論(「アメリカ現代詩におけるフランス象徴詩の衝撃」)において言及されている Rosenberg (1959), Rexroth (1961), Hoffman (1967) 等や、エリオット、クレイン、スティーヴンズの個別作家研究(例えば、Frye (1963), Weinberg (1969); Dembo (1960), Irwin (1985); Buttel (1967), Benamou (1972) など)についてさらに詳しく検討する必要があるであろう。

3. 「アメリカ象徴主義」の議論

ここで以上のような国際的、汎ヨーロッパ的な伝統を主張する批評的立場に対立するものとしてアメリカ自国の文学的伝統において「象徴主義」を定義し、フランス象徴派の影響を認めながらも、それとは独立して発展してきた経緯においてアメリカ文学の独自性を説明する立場があることを指摘したい。

Charles Feidelson の『象徴主義とアメリカ文学』(1953)における議論は主としてそのような批評的立場から、まず、ホーソン、ホイットマン、メルヴィル、ポウの4人を「アメリカ象徴主義者」として定義する。そしてそのような定義の根拠を言語の本質的「象徴性」に求め、今世紀前半を支配した新批評的立場の批評家・作家・思想家(W. Empson, I. A. Richards, R. P. Blackmur, A. Tate, J. C. Ransom, F. R. Leavis, C. Brooks, W. K. Wimsatt; J. Joyce, H. James, T. S. Eliot, E. Pound, G. Stein, P. Valery; E. Cassirer, S. K. Langer, K. Burke, A. N. Whitehead 等)の諸説を援用し現代文学の象徴主義的傾向を説明する。さらにピューリタニズムのもつ本来的に「象徴主義的」な思考を「アメリカ的伝統」として擁護することにより、また、メルヴィルにおけるエマソンの思想を、そしてメルヴィルの現代性を論ずることにより、「アメリカ象徴主義」の伝統を主張している。このような Feidelson の主義を要約すれば、「自ら

の方法に対する自意識が、エクスタシイやアポカリプスを欠いているために超越を与えることの出来ぬ美学の明白な結果となっている」(Riddel: 1965, p. 188) アメリカ象徴主義者のディレンマと言え、Harry Levin (1958) の同様な主張と併せてサンボリズム研究が抱える根本的な定義問題を提起する方向の研究であろう。

この Feidelson の議論の根拠の一つは当然のことながら、フランス象徴派詩人のポウ解釈がある。勿論ボードレー、マラルメ、ヴァレリー等が理解したポウは、エリオットも言うように (T. S. Eliot, *From Poe to Valery* (1948) in Chiari: 1970), 「英語の不十分な理解によってフランス人達がポウを過大評価した証拠は、従って純粹に否定的なものとなる。つまり、彼らは我々が気付いている [ポウの] 弱点に患わされることがない、ということである」(p. 93) とはいえ、このことは逆にポウ以来の「アメリカ象徴主義」の議論を成立させることにもなる。

実に言語間の「影響」の問題は言語内の「影響」以上に簡単に論じることの出来ないことは、サンボリズムという主題のみならず、それを研究する方法上の問題にも現れており、例えば、従来のいわゆる「英米文学研究」において大陸からの影響に対する過剰なまでの禁欲的な研究態度 (例えば、英文科における「ロマン主義」研究と仏文科或いは比較文学科における「サンボリズム」研究という奇妙な分裂) となって現れているのではないか⁴⁾。

現代詩研究においてもサンボリズムの遺産を検討することが不可避的なものとなっていると思われる一方、いわゆる「世紀末文学」の否定的評価を契機として「モダニズム」の革新性や、「ロマン主義」の伝統を強調する意見が支配的になった批評的風土はそのような研究方法上の問題を反映しているのかもしれない。例えば、Harold Bloom のスティーヴンズ論におけるサンボリズムの没評価はその極端な現れと見なすことが出来よう。

Bloom の批評はイエール大学の先達 M. H. Abrams のロマン主義美学論 (1953) などから出発したロマン主義の修正理論として見なすことが出来るが、特にエマソン以後のアメリカ的変容をテーマとしている点は新批評的立場におけるロマン主義の否定論 (新古典主義的文学観) とは鋭く対立するのであり、同じくロマン主義の修正理論をレトリック解体の根拠としながらも、本質的にサンボリスト的な批評態度を取り続けた (比較文学教授) Paul de Man とは異なり、本来的にアングロ=アメリカの連続性を強調するこの英文学教授の「影響の不安」説はフランス象徴派の影響を排除しようとした

点においてばかりでなく⁵⁾、アメリカ文学の「国際性」(例えば、パウンド、エリオットに代表される亡命者文学)及び、モダニズムに象徴される現代文学の「現代性」をも Bloom 自身の唱えるポスト啓蒙主義 (=ロマン主義) 的神話の宇宙へと解体してしまっただのではないだろうか。

以上のような没サンボリズム説はいわゆる「自国文学」と「外国文学」という形式的区別が前提とする文学の「土着性」(翻訳不可能性)を単に主張する立場(作家研究において伝記や書簡、歴史的・社会的環境や精神的・文化的風土といった「外在的」な事実を強調したり、出典やテキストを問題とする伝統的研究を含む)とも異なるはずであるが、その「歴史主義的」でしかも「神話創造的」な批評態度は奇妙にも、Guyard が『比較文学』の中で述べているような思想史や「一般文学」といった文学的コスモポリタニズムの問題と微妙に重なる方向の研究態度だと言わざるを得ないであろう。

4. もう一つの「象徴主義」研究

ここで再び「サンボリズム」を広義に解釈した今世紀における学際的諸科学(神話学、文化人類学、精神分析学、現象学、フォルマリズム、記号論、等々の諸文化学)に啓発された研究におけるサンボリズムの評価を概観することにより、逆にサンボリズムの美学理論がいかにかに受容されているかを考察してみる。

まず、結論的に言えば、この種の研究の主たる関心はサンボリズムという一つの文学「流派」(或いは「運動」)が引き起こした様々な文学的現象よりも、より広汎な文化現象としてサンボリズムを捉え、専ら、その神話的「原型」を狩猟することにより、個々の文学作品に現れる象徴主義的「特徴」(差異)をより一般化した神話学的「体系」(反復)へと還元しようとするものと言える。従って個々の「象徴」(記号)を体系化した一つの「象徴体系」としてのサンボリズムの考察であり、いわゆる「フランス象徴派」という歴史的脈絡を無視した研究でもある。

例えば、Northrop Frye は『批評のアナトミー』(1957)で、彼がマラルメ、ランボー、ヴァレリー、リルケ、パウンド、エリオットと言及して述べるサンボリズムの詩的意味を「求心的」な「情緒的統一」に求めたり(pp. 80-81)、第4試論:「ジャンル理論」において叙情詩を「連想のリズム」として規定し、ワーグナーの楽劇を引いて詩と音楽の合一を理想とするサンボ

リスト美学を引き合いに出したりする一方で (p. 274), 第2, 第3試論の「象徴」と「神話」の理論において独自の分類法—モチーフ, サイン, イメージ, アーキタイプ, モナドとしての象徴や, 四季のミュトスなど—によって理論の体系化を目指す行為は Frye の神話学的体系の宇宙を (細部の実践的な妥当性よりも体系全体の象徴的な整合性を求める意味において) 極めてサンボリスト的 (例えば, マラルメ的「書物」の概念を想起させる) 著作であると言えるのではないだろうか。

Philip Wheelwright の『燃える泉』(1954) は, フランス象徴派には一切触れずに副題の「言語の象徴性の研究」を行ったものであり, ウパニシャドや古典古代の詩・神話・劇から現代詩まで広く神話的象徴を狩猟しつつ, 言語のもつ本質的な象徴性を新批評的言語理論によって体系化しようとした野心的著作である。特に “plurisignation” 「多重表象」や “soft focus” 「ぼかし」といった用語で詩的言語の多義性を説明したり, 想像力の4通りの働かせ方 (“confrontative imagining,” “imaginative distancing,” “archetypal imagining,” “metaphoric imagining”) に分類したり, 様々な図像の考察や, 古典劇における神話的表象を探ることによってまさに象徴主義的言語の神話的性格を明確に描いており, Wimsatt (1954) の同様な研究と併せて非サンボリスト的な, しかし極めて本質的にサンボリスト的な研究の実践であろう。

Gaston Bachelard の『火の精神分析』(1938) から『夢想の詩学』(1960) に到る一連の想像力論も極めてサンボリスト的な試みと言えるのではないか。例えば, 『空間の詩学』(1957) において, ボードレールが使う “vaste” という単語のもつ意味の拡がりをミンコフスキーの「反響」の概念を援用して説明する時 (邦訳 pp. 237-45), ボードレールの「交感」は Bachelard 的カテゴリーである「無限性」へと還元され, そのことは逆にサンボリスムの詩法の現象学的解釈として Poulet (1949) や, 或いは記号論的解釈の実践として Barthes (1970) と並んで記憶されるべきであろう。

ここでさらにポスト=マラルメ的な代表的文芸批評として Marice Blanchot の『文学空間』(1955) を挙げねばならないであろう。主題としての「マラルメの体験」のみならず Blanchot の言説自体が透徹した明析と共に暗示と言及の体系へと自らを昇華している点は彼自身の文学の「幻想性」(Sartre: 1947) の説明になる以上にサンボリスト的性格を帯びているはずである。例えば, この書物の「中心」とされる「オルフェウスの注視」にお

ける「書くことの本質が、体験の困難さが、靈感の飛躍が存在する」(邦訳 p. 248) ことの意味はオルフェウス神話に象徴されたサンボリスト美学の意味ともなっているはずである。

最後に既にサンボリズム研究者 Balakian によって特筆されるべき研究として挙げた James A. Boon の『象徴主義から構造主義へ——文学的伝統におけるレヴィ=ストロース』(1972) を以上のようなポスト・サンボリズム研究の正当性を主張するものとしてみなすことが出来よう。この特異な著作の主たる目的は副題にあるようにボードレール、マラルメ、ルソー、プルースト等の作家に代表されるサンボリズムの方法を手段としてレヴィ=ストロースのテキストを解読しようとするものであるが、著者が「序文」で多分に弁明的に述べる比較方法の恣意性は、本論を読み進むうちにむしろ必然的なものであることが分かり、特にレヴィ=ストロースとサンボリストたちが共有する「表層的な親近性」を越えて、ボードレールの「猫」の構造分析やレヴィ=ストロースによる神話の構造分析のサンボリスト的性格を様々な言語哲学を参照しつつ解説する章は極めて啓発的である。

以上のサンボリズムの神話学=構造主義的研究の若干例は勿論、私達の研究題目からは大いに逸れたものではあるし、「研究」と呼ぶにはあまりに恣意的で安易な解釈を拒むものもあるが、逆にそれらの逸脱の意味は単なる比較研究の陥る実証的誤謬を本質的に打破し、補完する性質のものである。

5. 近年の解釈学的サンボリズム研究

以上の構造主義的研究の若干例は、60年代から70年代前半に盛んになった思潮としての構造主義をその代表的な理論=実践者であるレヴィ=ストロース、ローマン・ヤコブソン、ミシェル・フーコー、ロラン・バルト等の思想家たちの思考を積極的に取り入れてサンボリズム研究を行おうとした貴重な実践例であると思われる。

ではここで、70年代後半から今日に至るポスト構造主義、とりわけディコンストラクション(脱構築)と呼ばれる近年の解釈学的批評におけるサンボリズムの評価を考察してみる。しかしながら、予め断っておかなければならないのは、以下の考察は題目の「アメリカ現代詩におけるフランス象徴詩の影響」というのではなく、「サンボリスト的思考に影響された現代詩研究」の今日的な現れの考察とならざるを得ないということである。

以上のような観点から近年の脱構築批評における代表的なサンボリズム研究者を挙げるとすれば、Paul de Man (1919-1983) であろう。もちろん彼を「サンボリズム研究者」と呼ぶのは彼を「比較文学教授」と呼ぶのと同じくらい脱構築批評を実践した彼の意に反することであろうが、著作の大半がヨーロッパの現代思想や文芸批評の他に主として19世紀のロマン主義以降の作家（ワーズワース、シェリー、キーツ、イエイツ、ルソー、プーレスト、ゲーテ、リルケ、ヘルダーリン、クライスト等）を扱っている一方で、通常、の文芸史的な「ロマン主義」と「象徴主義」の微妙な差異を de Man 自身、脱構築的な修辞学理論へと解体してしまったとすれば、敢えて de Man を極めて「サンボリスト的な」ロマン主義文学研究者と呼ぶことが出来るのではないか⁶⁾。

以下、私達は以上のような批評史的批評の前提の有効性を立証するためにも「序論」的な枠組みの中であるが、de Man の『読むことのアレゴリー——ルソー、ニーチェ、リルケ、プーレストにおける比喩的言語』(1979) から序論とリルケの詩の修辞的な読みを概観することで彼の本質的にサンボリスト的な批評態度を明らかにしてみたい。

まず、「記号論と修辞」と題された導入的論文における主要な主張を要約すると次の如くなるであろう。(1) フォルマリズム批評（アメリカの新批評）が主張する内在的な「形式」の外在的な「意味内容」に対する優位〔従来の外的形式と内的意味という比喩的2分法の逆転〕及び、(2) 記号論の説く「記号」と「指示対象」の乖離による言語の意味作用の未決定化〔記号の恣意性による指示対象の記号化〕の二つの結果、特に後者の認識が導くものとして、言語の文法〔統語〕構造と修辞構造の2律背反性〔統語構造がもつべき単語の交換可能な変形生成的性格と修辞構造がもつべき単語間の（交換不可能な）近接的關係〕の認識が生じ、特に修辞学的にはメタファー（変形的・暗示的喩）とメトニミー（交換的・明示的喩）の対立的關係にたいする関心となって現れていると指摘される。つまりバルト、ジュネット、トドロフなどの修辞学者達が、ソシュールやヤコブソンの構造主義的記号論における上記の2律背反的対立を解消することで「後退」した様は、オースティンの発話行為理論における説得のレトリックにおいても、さらにはバークやパースの記号理論においても同様の「非弁証法的な」記号論的レトリックを生み出し、このことが逆に de Man 自身が主張する修辞の論理に対する優位（「修辞は論理を根源的に宙づりにし、逸脱的な指示作用のめまいを起こ

させるような可能性を開示する。」p. 10) へと導いている。ひいてはデリダ的な修辞疑問文 (“What’s the difference?”) とイエイツの詩における自己解体的な修辞疑問文 (“How can we know the dancer from the dance?”) 及びプルーストの小説からの「メタ比喩的」なテキストの例を引いて各々の修辞の持つ自己解体的作用を指摘する。それは言語の記号論的構造を修辞的構造へと「置き換える」ことにより修辞が論理と対立・矛盾する（二つの修辞疑問文における文法の修辞化、プルーストの修辞的文章の文法化）ことによって言語の意味作用の決定不可能性を明らかにすることである。最終的にニーチェの修辞論を援用し「否定的な確信」（或いは定言の真実性＝虚偽性に対する確信が導く盲目性）へと到達する de Man の読みは従って脱構築理論の中で極めて「厳密な」ものであろうとする一方、以上の如く解体されたテキストがもはや再構築的な指示作用を止めて際限のない自己解体を繰り返す（規範逸脱的な読みへと向かわせる）テキストの産出へと向かう「エクリチュールの戯れ」的現象を確認する悦ばしき知識にも到達する意味で極めて「戯れ的なレクチュール」にもなっている。

「比喩」と題されたリルケ論ではリルケの詩の比喩形象のもつ絵画的で「幻惑的な」力や、人間存在の本質的な不毛を克服し、その疎外された性格を肯定する「実存的救済」の約束—特に後期の詩における悲歌から讃歌への転移—といった主題的関心が必然的に詩的言語の修辞によって「問題視」（さらには解体）される過程を立証しようとするものである。まず、『時禱詩集』（1905）と『形象詩集』（1906）との明瞭な断絶に示される前期と後期の技法上の変化を前者の典型的詩 (“Ich liebe dich...”) における音声の比喩にたいする優位が、後者の “Am Rande der Nacht” における音声主体の消失による比喩形象の優位へと逆転される過程に辿り、特にこの修辞法における逆転を交差対句法に見出している点は、「物」を凝視することによって内面世界を描こうとした詩人リルケのまなざしの修辞性（虚構性）を暴くことである。そして交差対句法的逆転が導く鏡像的反映や変転の比喩（時間的な修辞）としての鐘音などを『新詩集』（1907-8）において例証する作業はリルケを「全能な存在へと飛躍する象徴的な階層の網」として救済者的テキストとして見なすのでなく、「シニフィエの修辞上の可能性に向けられた詩的技術の成果」としてリルケの全体化を考察するためである、と de Man は主張している (p. 45)。

さらにこの交差対句法的逆転の主題的表現がオルフェウス神話のモチーフ

(「オルフェウス、エウリディケ、ヘルメス」、『ドゥイノの悲歌』第10、『オルフェウスに寄せるソネット』)において敷衍されるが、そこで例えば、オルフェウスが自らの豎琴を忘れるほどに音を聴くことに対し不能になる(「オルフェウス、…」第3節)とか、最終節でヘルメスがオルフェウスを地上へと導く上昇を諦め、エウリディケを非在の世界へと追っていくという逆転を詩的言語の喪失と解釈し、指示対象の喪失をリルケ的「内面性」に結び付けたり、このような言語の指示対象の喪失を逆に「シニフィエの解放的な見方」(バルト『S/Z』)と呼んで比喩形象の純粹性を主張する de Man は一方でリルケをトラークルやツェランの詩へと結び付ける(表現主義的)純粹詩の系譜をも示唆している。

『ドゥイノの悲歌』は、従って「比喩形象にたいする真に実存的な哲学」を述べるものとなり、これは詩人が「テキスト外的な権威を断念した」ためであると de Man は主張するが(pp. 49-50)、『オルフェウスに寄せるソネット』(1:11)を引いてその交差対句法的修辭を分析し、例えば“Oder meinen beide/nicht den Weg, den sie zusammen tun?”〔イタリックは de Man による〕に表現された言語の自己言及(或いは比喩形象作用の失敗)による意味作用と修辭の不一致を指摘してはテキストの欺満性を、「言語の戯れ」を主張する。最終的に晩年のフランス語詩集からの一節(“...mensonge, tu as des yeux sonores.”—“Il faut fermer les yeux...”))を引いて以下のように結論する——「リルケの詩に内包される約束は、注釈者たちが自らの切望なる信念においてかくも厳密な複雑さで言い表したにもかかわらず、リルケ自身によって虚言に満ちた崩壊する視野の内部に置き換えられたのである。」(p. 56)

以上の極めて大雑把な要約は、de Man の議論の微妙なサンボリスティックとは対照的であり、従って彼の脱構築批評の修辭的意味を無視する過ちを犯していることを認めねばならないと思われるが、Denis Donoghue が de Man の読みを「記号論と修辭」を例にとって論じている(Donoghue: 1984, pp. 172-184)のを参考にすれば、あながち不当な要約ではないと思う。ここで以上のような de Man の批評態度を Donoghue や Bloom (1977, esp. pp. 385-87)のように批判することは簡単なことかもしれないが、既に診たように本質的に言語の修辭性を問題とし、その自己解体作用を指摘する de Man の読みは、もはや言語が現実を再現するものではなく、言語の中にしか実在性を持ち得ない「象徴の森」をさ迷い、遂には

その迷宮的アポリアに行き着くといったサンボリストの末裔的批評の典型的な現れとみなすことが出来るのではないだろうか。

6. 展 望

最後に Michel Benamou がスティーヴンズとフランス象徴派詩人の比較研究 (1972) の「序論」で自らの方法論上の課題を述べているのを引用することで今後の研究の「展望」の参考としてみたい。

1) 「詩人と人類学者は根源、中心へのノスタルジアを共有している。」
(p. xiii) [歴史から神話への移行は神から人間への移行と逆説的に結び付いている]

2) 「文芸批評における国家的価値観から普遍的価値観への移行は実証主義的解釈から構造主義的解釈への移行を意味している。」(p. xvii) [実証主義者は創作の意識性を、従って出典や影響を、そして創作者の意図を考察することによって「模倣」や「独創性」を問題とするが、構造主義者は象徴的な無意識的類似性を普遍的な神話的意味へと辿ることによって「体系」の真实性を問題とする]

この2点は私達が René Taupin の実証研究の評価から出発し、Anna Balakian が描くサンボリズム研究の新たな展開を通じて、60年以降の構造主義、そしてポスト構造主義的研究への流れを概観してきたことに基本的な意味を与えるであろう。

註

*この小論は文部省の昭和62年度科学研究費補助金による奨励研究として提出した題目「アメリカ現代詩におけるフランス象徴詩の影響」の「批評史的序論」を形成するものとなるはずである。

1) 文献はすべて著者名と出版年のみを括弧内に示し、詳しくは末尾の「引用文献」を参照されたい。また、当小論に付けた文献一覧はあくまでも「序論」のための文献であるので、より包括的な参考文献の一覧は当題目による研究が完成する時を待たねばならないであろう。

2) 「サンボリズム」“symbolisme”の定義は第2節でも述べるように一義的でないが、当小論では便宜的に、19世紀フランスにおけるボードレールやマラルメらのいわゆる詩史的な意味での「フランス象徴派」や、第4節で論ずるような象徴大系を追求するより広い意味での「象徴主義」とも区別して訳し分けた。

- 3) 英語圏に限ってサンボリスムの全般的な研究を比較的早い時期に行ったものを挙げるならば、C. M. Bowra (1943), A. G. Lehmann (1950), K. Cornell (1951), P. M. Jones (1951) 等である。
- 4) このことは逆にフランスにおける英文学研究（例えば、Louis Cazamian の言う「イギリス象徴主義」という莫とした議論）が示すように根本的な感受性の違いに由来するものであろう。
- 5) Cf. 「言語間の『影響』は我々の時代においては必ずと言っていいくらい、言語内における影響にたいする巧妙な仮面である。」(Bloom: 1977, p. 20)
- 6) サンボリスト美学がロマン主義的「内面」(夢)と「外界」(現実)の実体論的差異を共に「照応」する言語内の象徴的差異に置き換えた点において、以下で論じられる脱構築的プロセスと類似するためである。

引用文献

- Abrams, M. H. *The Mirror and the Lamp: Romantic Theory and the Critical Tradition*, New York, Oxford U. P., 1953.
- Aguirre, J. M. *Antonio Machado, poeta simbolista*, Madrid, Taurus, 1973.
- Anderson, David L., et al., comps. *Symbolism: A Bibliography of Symbolism as an International and Multi-Disciplinary Movement*, New York, New York U. P., 1975.
- Bachelard, Gaston. *La poétique de l'espace*, Paris, P. U. de France, 1957. [岩村訳『空間の詩学』思潮社, 1969]
- Balakian, Anna. *The Symbolist Movement: A Critical Appraisal*, New York, New York U. P., 1977.
- Barthes, Roland. *S/Z*, Paris, Seuil, 1970. [沢崎訳『S/Z——バルザック「サラジューヌ」の構造分析』みすず書房, 1973]
- Benamou, Michel. *Wallace Stevens and the Symbolist Imagination*, Princeton, Princeton U. P., 1972.
- Blanchot, Maurice. *L'espace littéraire*, Paris, Gallimard, 1955. [栗津・出口訳『文学空間』, 現代思潮社, 1983]
- Block, Haskell. "The Impact of French Symbolism on Modern American Poetry," *The Shaken Realist: Essays in Modern Literature in honor of Frederck J. Hoffman*, eds. M. J. Friedman & J. B. Vickery, Baton Rouge, Louisiana State U. P., 1970.
- Bloom, Harold. *Wallace Stevens: The Poems of Our Climate*, Ithaca, Cornell U. P., 1977.
- Bowra, C. M. *The Heritage of Symbolism*, London, Macmillan, 1943.

- Brooks, Cleanth. *Modern Poetry and the Tradition*, Chapel Hill, U. of North Carolina P., 1939.
- Buttel, Robert. *Wallace Stevens: The Making of Harmonium*, Princeton, Princeton U. P., 1967.
- Cazamian, Louis. *Symbolisme et poésie, L'exemple anglais*, Paris, Nenchatel, 1947. [岡本・竹園訳『象徴主義と英詩』松柏社, 1965]
- Chiari, Joseph. *Symbolism from Poe to Mallarmé: The Growth of a Myth*, New York, Gordian Press, 1970.
- Cornell, Kenneth. *The Symbolist Movement*, New Haven, Yale U. P., 1951.
- de Man, Paul. *Allegories of Reading: Figural Language in Rousseau, Nietzsche, Rilke, and Proust*, New Haven, Yale U. P., 1979.
- Dembo, L. S. *Hart Crane's Sanskrit Charge*, Ithaca, Cornell U. P., 1960.
- Donoghue, Denis. *Ferocious Alphabets*, New York, Columbia U. P., 1984.
- Eliot, T. S. "The Metaphysical Poets" (1921), *Selected Essays*, London, Faber, 1932.
- Feidelson, Charles. *Symbolism and American Literature*, Chicago, The Univ. of Chicago P., 1953.
- Frye, Northrop. *Anatomy of Criticism: Four Essays*, Princeton, Princeton U. P., 1957
- T. S. Eliot, Edinburgh, Oliver & Boyd, 1963.
- Guyard, Marius-François. *La littérature comparée* (Collection QUE SAIS-JE? No. 499), Paris, P. U. de France, 1951. [福田訳『比較文学』, 文庫クセジュ 87, 白水社, 1953]
- Gsteiger, Manfred. *Französische Symbolisten in der deutschen Literatur der Jahrhundertwende (1869-1914)*, Bern, Francke, 1971.
- Hassan, Ihab. *The Dismemberment of Orpheus: Toward a Postmodern Literature*, New York, Oxford U. P., 1971.
- Hoffman, Frederick J. "Symbolisme and Modern Poetry in the United States," *Comparative Literature Studies*, IV, 1967.
- Irwin, John T. "Foreshadowing and foreshortening: The prophetic vision of origins in Hart Crane's *The Bridge*," *Word & Image*, I, 3, 1985. [as a part of his forthcoming book entitled '*Appolinaire Lived in Paris. I live in Cleveland, Ohio*': *Essays on the Poetry of Hart Crane*]
- Jones, P. Mansell. *The Background of Modern French Poetry*, Cambridge, Cambridge U. P., 1951.
- Karátson, André. *Le symbolisme en Hongrie, L'influence des poétiques français*

- sur la poésie hongroise dans le premier quart du XXe siècle*, Paris, P. U. de France, 1970.
- Kugel, James L. *The Techniques of Strangeness in Symbolist Poetry*, New Haven, Yale U. P., 1971.
- Lawler, James R. *The Language of French Symbolism*, Princeton, Princeton U. P., 1969.
- Lehmann, Andrew G. *The Symbolist Aesthetic in France, 1885-1895*, Oxford, Basil Blackwell, 1950.
- Levin, Harry. *The Power of Blacknes: Hawthorne, Poe, Melville*, New York, Knopf, 1958.
- Peyre, Henri. *Qu'est-ce que le symbolisme?*, Paris, P. U. de France, 1974.
[cf. *La littérature symboliste* (Coll. QUE SAIS-JE? No. 82, P. U. F., 1976) 堀田・岡川訳『象徴主義文学』文庫クセジュ 661, 白水社, 1981]
- Poolet, George. *Études sur le temps humain*, Paris, Gallimard, 1950. [井上, 他訳『人間的時間の研究』筑摩書房, 1969]
- Pratt, William. *The Influence of French Symbolism on Modern American Poetry*, New York, AMS, 1985. Translation of: Taupin, René. *L'influence du symbolisme français sur la poésie américaine (de 1910 à 1920)*.
- Rexroth, Kenneth. "The Influence of French Poetry on American," *Assays*, New York, Ross-Erikson, 1961.
- Riddel, Joseph N. *The Clairvoyant Eye: The Poetry and Poetics of Wallace Stevens*, Baton Rouge, Louisiana State U. P., 1965.
- Rosenberg, Harold. "French Silence and American Poetry," *The Tradition of the New*, New York, 1959. [Repr. Chicago, The Univ. of Chicago Press, 1982]
- Sartre, J. Paul. "Aminadab," *Situations I*, Paris, Gallimard, 1947. [佐藤 訳「アミナダブ」, 『シチュアション』(『サルトル全集』第11巻, 人文書院) 1947]
- Strauss, Walter A. *Descent and Return: The Orphic Theme in Modern Literature*, Cambridge, Harvard U. P., 1971.
- Symons, Arthur. *The Symbolist Movement in Literature*, London, 1899. [Repr. New York, Dutton, 1958]
- Weinberg, Kerry. *T. S. Eliot and Charles Baudelaire*, The Hague, Mouton, 1969.
- Wheelwright, Philip. *The Burning Fountain: A Study in the Language of Symbolism*, Bloomington, Indiana U. P., 1954.
- Wilson, Edmund. *Axel's Castle: A Study in the Imaginative Literature of 1870*

to 1930, New York, Scribner, 1931.
Wimsatt, W.K. *The Verbal Icon: Studies in the Meaning of Poetry*, Lexington,
The U.P. of Kentucky, 1954.